

かすみの溪たにの一助いちすけ

監 修 .. 丸山幸太郎

構 成 .. 西田充晴

脚 本 .. 丸山稔子

作 曲 .. 押山晶子

イラスト .. 坪井繁和

制 作 .. 特定非営利活動法人ぶんかのタネ

【登場人物】

- 一助 (25歳) 旅の若者  
 カヨ (19歳) 庄屋の娘  
 円了 (60歳) 藤桜寺の住職  
 源兵衛 (50歳) 庄屋  
 新八 (35歳) 組頭  
 タエ (31歳)  
 村の衆

- キタロー (25歳) 新八と対峙 (村男、村男A)  
 おみつ (18歳) おとつあんを亡くした娘  
 村男B (30歳)

【場面】

- 1 藤代村と谷川 (夏) P 3  
 2 藤桜寺・本堂 (翌日) P 4  
 3 谷川沿いの、一角 P 8  
 4 藤桜寺・本堂・表 (夜) P 1 1  
 5 谷川沿いの、一角 (夜) P 1 2  
 6 谷川沿いの、一角 (日替わり) P 1 5  
 7 藤代村・川沿いの一角 (昼) P 1 9  
 8 藤代村 ラストシーン P 2 3

【曲目】

- 序曲 P 3  
 出水の爪痕 (タエの独唱) P 3  
 兄様を偲んで (カヨの独唱) P 6  
 ヤエの観音様 (一助の独唱) P 9  
 星空を見た二人 (一助、カヨの二重唱) P 1 3  
 われらが村をお守り給え (カヨ、タエ、一助の三重唱) P 1 5  
 間奏曲 P 2 0  
 心の花 カヨへ (一助の独唱) P 2 0  
 かすみの溪音頭 (全員合唱) P 2 4  
 終曲 P 2 6

# 1 藤代村と谷川（夏）

## 〈序曲〉

N 池田山のふもと、藤代村には、初秋の風が棚田や茶畑に吹き渡り、鳥のさえずりが其処此処で聞こえています。村人たちは、田畑で野良仕事に励み、声を掛け合っていました。

と、一転、雷鳴がとどろき、鳥が飛び立つ羽音とともに、ざあつと雨が降り出しました。徐々に雨足は激しくなり、村人は家々の雨戸を閉め、夏台風が早く過ぎ去ることを念じますが、雨は一昼夜経つても止みません。

やがて、谷の方から地響きのような音がし、ゴオーツという音とともに谷の急流が暴れ出し、土石を巻き込んだ流れが、里に押し寄せたのでした・・

「堤が切れるぞ、みんな逃げろ！」 「お母ちゃあん、怖いよお」

「こつちだ、早くしろッ」村人は、着の身着のまま、家族とともに高台を目指しました。

しかし、猛り狂ったような土石流は田畑や家々を呑み込み、逃げ遅れて流された者もおりました。

## 〈明転〉

## 〈出水の爪痕〉

うちの人が 死んどった

潰れた家の 中で

私のお腹を なでながら

この子の名前を つけたのに

うちの爺さま 死んどった

田畑（でんばた）一緒に 流された  
お伊勢参りに 行くはずを

旅のお人が 言つとつた

堤あれば 助かると

庄屋さんが 言つとつた

堤作れば 咎めあり

大雨の度 怯えてる

地鳴りの音で 目を覚ます

田畑（でんばた）奪う 天の怒り

棲家を奪う 山の怒り

村人呑み込む 地の怒り

## 〈暗転〉

## 2 藤桜寺・本堂（翌日）

### 〈明転〉

N 大雨と土石流が藤代村を襲った翌朝、這う這うの体で逃れてきた村人たちが、藤桜寺の本堂に身を寄せていました。

怪我人が多数おり、女たちが、その介抱にせわしく動き回っています。その片隅に、横たわっていた旅の若者、一助が目を覚ましました。

ある事情で、諸国をまわる流浪の身となった一助は、池田の霞間ヶ谷に差し掛かったところで、この豪雨に遭ったのでした。

一助 ……ここは？…

円了 気がつかれたか、旅のお方。ここは藤桜寺、私は住職の円了です。木にひっかかって流されずにすんだようですなあ、運の強い人だ…

一助 (起き上がろうとして) うっ！

円了 流されたときに右足をぶつけたようです。折れておるかもしれんからしばらくは動けませんぞ。まちから医者を呼んで、大怪我をした者から順に手当てしますから、当面は体をお休めなさい。

一助 ・・世話をおかけして、申し訳ない・・

円了 困ったときは、お互いさま、ですよ。

N 庄屋の娘カヨが、村の女タエとともに、白湯を盆に載せ、怪我人に配っています。家や田畑、家族を失った者たちを励まし、怪我人を介助して回る、器量よしのカヨに、一助は目を奪われました。

タエ はいよ。温かいお白湯だよ。

キタロー オラ、どうせなら、カヨさんにもraitたいな・・

タエ フンツ 悪かったね

カヨ キタローさん！ タエさんは握り飯も作ってくれたのよ

キタロー えっ、じよ、冗談だよお、おタエさんの握り飯食いたいよお

カヨ フフフ・・さ、みなさん、白湯ですよ

円了 カヨどのは、若いのに働きの者です。ああやって目上の女子衆(おなごしゆ)をたてて、よう気がつく。また気丈なもんです。兄の蔵之介さんが、昨夜の洪水に吞まれて亡くなったというのに：  
兄様が？・・

N そこへ庄屋の源兵衛が、組頭の新人を連れてやってきました。鉄砲水で怪我人がどれだけ出たか、被害の様子を見て回っていたのです。

田畑が土石で埋め尽くされ、働き手も怪我を被っている有様を藩へ報告し、年貢減免を訴えたいところでした。

源兵衛が、息子の蔵之介が川辺に土囊を積んでいる間に、大水に流されて亡くなった悲しみをおくびにも出さないには訳がありました。

豪雨が降れば、水も石も真つ逆さまに流れ落ちる屏風谷のふもとにあつては、堤がほしいのは山々ですが、実は、谷の向こう岸は徳川家のご領

地で、自分の村を守るための堤の普請の話などご法度なのです。  
息子の蔵之介が、村人を扇動するかの様に堤の普請を訴えたことは、  
庄屋としての立場を悪くしたのです。

円了　これは、庄屋様・・・この度は御子息のこと真残念に存じます。

源兵衛　いや、あれは自業自得だ。わざわざ谷川まで登って、土嚢を積んど  
ったとは、たわけ者だわ。

円了　しかしそれは村を助けたいとの一心で・・・

源兵衛　（遮って）それで自分の命を失うたら、もともともあるまいッ。

あいつは跡取りだったんだッ、大たわけ者だ！

カヨ　お父様、そんな言い方って！・・・お兄様は言うとりました。谷の  
切れ口に堤があればこんなことにはならないと。お父様がそれをお  
代官様に上訴しないから、お兄様はせめて土嚢を積もうとして・・・  
源兵衛　（遮って）おまえは黙つとれッ。

カヨ　いいえ、下がりません。お父様は間違っています。何度も家や田畑  
を失い、家族を失い、こんな暮らしにいつまで耐えられるとお思  
いですか・・・

〈兄様を偲んで〉

兄様が　谷間に消えた

村の衆を　遠ざけて

一人　出水に向かつていった

山神様に　かけあうために

村を　お助けくださいと

水神様に　かけあうために

どうか　慎ましい暮らしを

どうか　お守りくださいと

兄様は 谷を上がった

堰を作ろうとした

兄様は 身を挺しても

堰を作ろうとした

山神様に かけあつた

村を お助けくださいと

水神様に かけあつた

どうか 鎮まりくださいと・・

私が堰になりますと・・

源兵衛

ええい！ ござかしい。黙らんか。

一助

カヨさんは間違っていないッ！

N 一助の、突然の一声に、一同が静まり返りました。

新八

誰だ、見ねえ顔だな。どこのもんだ？

一助

一助と申します。旅の途上、昨夜の大水に遭い、ご住職に助けてい

ただきました。谷川の流れを見ましたが、石堤があつたなら、流れ

の勢いを鎮め、ここまでの犠牲は無かつたかと・・

源兵衛

はああ？ 余所者がッ、知つたふうに口をきくな！

一助

私は、ある御料地で、普請奉行のもと、川普請をしておりまして……

訳あつて暇乞いをし、今は流浪の身です

新八

ほう、そうかい、なら、旅の人よ、どうすれば川が暴れねえか、お

知恵拝借といきましょうか。

一助

谷の傾斜が急で土石が流れ落ちるのですから、川中のところどころ

に石垣を作つて、川を階段のようにすれば、氾濫を防ぐことが・・

源兵衛

(不機嫌そうに) 川を階段のようにするだと・・フン！ そのよう

な話聞いたことがないわ！ だいたい、堤があればよいことくら

い、とうにわかつとる！：もう、よい、下がれ、若造！

円了

庄屋様・・

源兵衛 堤の話はもう聞きたくない！ 新八行くぞ！

新八 あ、へい。あいすいません。

N 源兵衛と新八は不機嫌そうに肩を揺らし、本堂から出て行きました。

円了は、一助に、藤代村を出水から守る堤を作れば、反対の左岸、徳川尾張藩のご領地へ氾濫が及ぶかもしれないため、お上のお咎めを恐れ、普請を願い出ることできないという事情を話しました。

カヨと村人も、長雨に怯えて毎日を過ごして、地響きの音を合図に逃げだし、土石流に村が吞まれていくのを、ただ見ている他ない、その辛さとやるせなさを語りました・・

〈暗転〉

### 3 谷川沿いの、一角

〈明転〉

N まだ日も昇らぬ朝靄の中、寝付かれぬまま早起きした一助が杖をつきながら、川辺を歩いていると、林のほうへ、大きな石を荷車に積み運ぶ若い衆の姿がありました。その傍らに、ほうかむりをしたカヨがいます。カヨは、驚く一助にある計画を話しました。亡くなった兄の蔵之助に代わって、谷川に堤を築くために、カヨに賛同する若い衆と相談して、まず大きな石を集め、源兵衛や新八たちに見つからぬよう、川岸の林に運び込んでいるというのです。

しかし、普請に明るい者が村におらず、石の積み方すら見当もつかず困っており、川普請の経験があるという一助に、知恵を貸してほしいと、カヨは頭を下げます。

カヨ お問い合わせします。

一助 ……お顔を、あげてください



カヨ それでは！

一助 いえ、お許しください。ほかの人を当たってください・・・

カヨ なぜ？

一助 私には、そのような仕事を成し遂げる自信も、資格もないのです！  
私は大切な妹を死なせてしまったんですから・・・

N 一助は、懐中仏（観世音菩薩）を取りだし、カヨに見せました。

カヨ この観音様は？・・・

N 一助は、辛そうに語り始めました。幼いころ両親を流行り病で亡くしてから、妹のヤエと二人きりで生きてきたことを。

三年ほど前、一助は普請の技師としての腕を買われ、ある藩で、蛇のよ  
うに曲がりくねり、氾濫の絶えない川の流れを変えるため、堤を築く  
仕事を請け負いました。

自分の作る堤はどんな嵐にも耐えると自信を持っていた一助が、普請  
の仕上げをしていると、大雨であつという間に川の水かさが増し、川が  
蛇行する辺りで、堤は土石流の勢いに耐えられず、押し流されました。  
川岸の村で兄の帰りを待っていたヤエは、逃げる間もなく、大水に呑ま  
れてしまったのです。

### 〈ヤエの観音様〉

嵐に負けず 出水を封ずる

高くそびえる 守りの堤と

私は天を あなどった

土石を堰き止め 流れを変える

高くそびえる 守りの堤と

私は天を あなどった

未曾有みぞうの雨が そそぐ川  
未曾有みぞうの力を ためた堤

水は堤をかけたのぼり

水は堤を押し崩しくず

天は私を あざ笑わらう

ヤエは 信じて待っていた

堰の向こうで 待っていた

出水が 村を襲っても

ヤエは 信じて待っていた

観音仏を胸むねに抱だき

あにじやが 流れに先んじて

あにじやが 助けに来るものと

祈いのちりを捧ささげ 待っていた

ヤエは 渦うずに呑み込まれ

ヤエは 彼方かなたに消えていった

渦のなかから 手を伸のばし

あにじや たすけてくださいと

天よ なぜ 私を召めさぬ

天よ この身を引き裂さかぬ

ヤエは 私の身代わりに

ヤエは 渦に吞まれて消えた

いつも後ろを ついてきた

愛あいくるしい目で よく笑う

この世で一人の 妹よ

私は ヤエを殺した

N 一助の辛い過去を知ったカヨは、ヤエさんの命を奪ったのはあなたではないのだから、自分を責めないで！と慰めるが、一助の心の傷は深いものでした。

「私は暇乞いをし、宛もなく諸国を彷徨う、流浪の身となった。死んでしまいたいと、何度も思ったが、生き恥を晒している。ヤエだけでなく大勢の人を死なせてしまった私に、普請をする資格はない。だから堤普請については他を当たってほしい」と一助はかたくなです。

カヨは懇願します。「一助さん、今、痛む足を引きずって、川の様子を見にいらしたのは、ここに堤があれば出水が防げると分かっているから、いてもたってもいられないからでしょう」と。

しかし、一助は、カヨに背を向け、杖に頼りながら、その場を去ったのでした。

〈暗転〉

#### 4 藤桜寺・本堂・表（夜）

〈明転〉

〈P A〉 雨音

N 一助が本堂の濡れ縁に座し、ぼんやり懐中仏を見つめていると、円了がやってきて声をかけます。

円了 こちらにおられましたか。・・雨脚が強くなってきました。体を冷やすと、足の治りが悪くなりますよ。中へお入りなさい。

一助

円了 ・・失礼ながらあなた様のこと、カヨさんから聞きました。誰にでも過ちはあるもの。間違いを犯さない人間なんておりまじょうか。・一助 ・・簡単に言わないでください。私は、取り返しのないことを

した。・・大切な妹を死なせた。・・罪人なのです！

N 円了は、そんな一助に、親鸞聖人の教えを説きました。

自分の罪深さを自覚し、絶望に陥っている人こそ、悪人であり、「悪人」というのは、自分の罪深さを知るものである、と。

逆に、「善人」は、自己の偽善・罪深さに気づかない人であり、自らの過ちを背負う者こそ、正しい行いができる、と。

一助 ありがたい慰めのお言葉ですが：ヤエが死んだのは天の仕業ではなく、この私の手が招いた災いです：それなのに、私だけが生き残ってしまった……

〈P A〉 雨音が、急激に激しくなる。

N そこへ、ただごとならぬ様子で、組頭の新人が踏み込んできました。

新人は、「カヨさんが、こちらに来ていないか」と円了に尋ねます。

円了が、「寺には来ておられないが、カヨさんがどうかなさったか」と聞き返すと、「雨につられたかのように出ていったまま帰ってこないから、手分けをして探している。カヨさんは、藏之介さんが亡くなってから、気丈にふるまいながらも、時々何かにとり憑かれたかのように様子が変で、心配だ」と、言い残し、また慌ただしく出て行ったのでした。

一助 ……カヨさん…まさか！

円了 何か、心当たりでも？

一助 この雨を見て、谷川の方へ行ったのかもしれない。見てまいります。

〈暗転〉

## 5 谷川沿いの、一角（夜）

〈明転〉

〈P A〉引き続き、雨音。

N 夜更けの谷川のほとりで、カヨは、独り雨に濡れながら、大きめの石を運んできては、土囊のように積んでいたのです。

一助が、足を引きずりながらやってきて、カヨの姿を見つけると、駆け寄って石を降ろさせようと思いました。

一助 無茶はおやめなさい！

〈星空を見た二人〉

一助) おやめなさい 嵐の中 御身をさらすのは

カヨ) やめませぬ 女とてできることはある

一助) おやめなさい 石を持つ手が血に染まる

カヨ) やめませぬ この流れを止めるまでは

一助) おやめなさい その細い体が砕けても

怒涛の流れは 止めようもない

あなたが 身を投じても

兄者の無念は 晴らせない

堰を築けるわけでもない

悲しみの堰を築くだけ

カヨ) 雨が降るたび 恐れおののき

はがゆさに 成すすべもなく

せめて一石 祈りをこめて・・

ああああわたしは ああああ岩になりたい

鉄砲水を せきとめる岩に・・

一助) あなたはみんなの 心に咲く花

あなたは私の 心に咲く花

あなたを岩になど させはしない

あなたの命は 私が守ろう

N 一助が、カヨが抱える石をえいと奪い、川原に投げた瞬間、カヨは前につんのめるように倒れそうになります。

危ないッ、一助は、カヨの体を抱きかかえようとしませんが、二人はそのまま、バツシャーンッと、浅瀬にひっくり返ってしまいました。

カヨが目をつむって一助の体に覆いかぶさったまま、じつとしていると、一助の胸の鼓動が伝わってきました。

「一助さん、大丈夫？」とカヨが聞くと、一助は、「星だ・雨が上がった・」と言います。

身を起こして、カヨも空を見上げると、満天の星が瞬きながら、二人を見つめていました。

カヨ 一助さん、足は大丈夫？

一助 また折れてしまったかも知れない。カヨさんが重いから。イタタッ

カヨ 重い？ 失礼な！ あ、いえ、どうしましょう！ 私、人を呼んで・

一助 うそですよ。

カヨ まッ、ヒドイ！

一助 (笑いをこらえ吹き出す) ぷっ・

カヨ フッフ・

一助 カヨさん、こんな無茶じゃなく、あなたにできることがあります！  
いや、あなたにしていただきたいことが・

カヨ 私にできること？・

一助 私に毎日、握り飯をつくってはくありませんか？

カヨ えッ？

一助 石垣は、私がつくりますから。

カヨ ・・今、なんて・

一助 この私が、土石流の起こらぬ川にしてみせましょう。

カヨ 一助様！

N 一助は、カヨの手をそっと握り、こう言いました。

「私はたった一人の妹を失って、何もかも失った気がして、今日まで死んだように生きてきた。しかし、希望を失わないカヨさんの姿を見て目が覚めた・・もう、迷わない。私は、あなたを、この村を、守って見せる」

カヨは目を潤ませながら、一助の手を握り返しました。

〈暗転〉

## 6 谷川沿いの、一角（日替わり）

〈明転〉

N 谷川の中ほど、一助を中心に、村の若者が集まっています。川岸まで荷車で石を運ぶ者、降ろされた石を籠に入れ、担いで川中まで運ぶ者。一助の指示できびきび働いています。握り飯を運ぶカヨやおタエたち女の姿もあります。

〈われらが村をお守り給え〉

Tutti) 石を一つ

もう一つ（もひとつ）積んで

出水（でみず）よ ここで 留まれよ

水の神様 怒りを鎮め

山の神様 我らと村を

お守り給え

枝を一つ

もう一つ（もひとつ）積んで

出水（でみず）よ ここで 留まれよ

カヨ) 水の神様 怒りを鎮め

一助) 山の神様 我らと村を

[Tutti] お守り給え

タエ) この手で一つ

カヨ) もう一つ (もひとつ) 積んで

一助) 出水 (でみず) よここで 留まれよ

[Tutti] 水の神様 怒りを鎮め

山の神様 我らと村を

お守り給え

〈間奏曲〉

N その様子を遠巻きに見る村人たちが、ひそひそ話をしています。

「おい、あの一助とやらが、勝手に普請を始めたぞ」「若い衆やおなご」  
まで手伝つとるやないか!」「お代官に知れたら、えらいこっちゃ!」

「だども、谷川に堤があれば、もう田圃が流されることもねえで」。

処罰を恐れる村人たちは、複雑な思いで一助たちの様子を見えています

※歌の続き

一助) 皆 (みな) で一つ

もう一つ (もひとつ) 積んで

われらの暮らしを 守らん

水の神様 清き流れを

山の神様 豊かな大地を

お守り給え

カヨ) 心合わせて

もう一つ (もひとつ) 積んで

未来永劫 恵みの流れを

水の神様 美酒を召されよ



山の神様 実りを召されよ  
村に幸あれ

タエ)

この石は わたしの亭主  
この石は おいらのばあちゃん  
あの石は わしの孫娘  
われらは ここで石を積む  
われらは ここで生きていく

Tutti)

田畑を耕し 命を育て  
守りたい 暮らしがある  
守りたい 人がいる  
手を携え 共に生きよう

〈暗転〉

〈明転〉

N さて、その何日か後のことです。川原で、一助が村の若者と一緒に石を積み上げていると、庄屋の源兵衛と組頭の新八が、家中の者たちとやってきました。

村の若者が一助に協力して、石をいったん林の中に運び込み、秘密裏に事を運んでいたと知った源兵衛はすごい剣幕で、石の山を崩せとどなりつけます。

一助は、「藤代も尾張藩のご領地も、大水から守るよう、石垣を築いて見せます」と訴えますが、聞く耳を持ちません。

後ろの方に身を潜めていたカヨが前に出て、すつくと源兵衛の前に立ちました。

源兵衛 カ、カヨ・・お、お前まで・・わしの顔に泥を塗る気か！

カヨ　お父様、その目でしつかり見てください。出水で何もかも失った村のみんなが、こうして力合わせて、立ち上がったのです。

源兵衛　黙れ！　この恥さらしが！

N　源兵衛は、自分に立てつくカヨの頬をひっぱたきます。

一助　何をなさるんですか！

村娘　あんまりです！　庄屋様！　カヨさんは、おとつあんを出水で失ったワタシを励ましてくださったんです。

村男　そうだ！　カヨさんは、立派な方だ！

新八　カヨさんは、その男にだまされてとる！一助さんよ、妙な菩薩像を懐ふとしろに持つてるだろ。あんた隠れキリシタンじゃねえか？　お上に突き出してやろうか？

村男　根も葉もねえこと言うな！　組頭の腰こしぎんちやくが！

新八　な、なんだと！

村男　やるか？　相手になってやらあ

N　村人が、庄屋派はと、一助派に分かれて、まさに一触即発いっしょくそくはつのにらみ合いとなったその時・・

円了　鎮まりなさい！！　村が二つに割われて、どうする！

藤代の衆は、日照りに会い、凶作きょうさくに遭い、大水に遭いながらも、天の恵みを分かち合い、心合わせて、今日までやってきたのではないか。

ここにいるみなが、身内のようなものなのに、内輪うちわもめをして何の得とくにもならない。

村のためを思つて、石を積み、汗あせをかいておる者たちを諫いさめるとは、何事か！

円了　庄屋様、すべて、この円了が引き受けます。お上のお咎めがあれ

ば、普請を指図し、皆をたきつけたこの老いぼれ坊主が、磔にな  
ればすむッ！

源兵衛 ・ ・ ・ ううむ ・ ・ ・ 住職がそこまでおっしゃるのなら、ここは一旦、  
ワシが話を預かることとしよう ・ ・ ・ 新八、行くぞ！

N 源兵衛と新八たちは、円了の迫力に押され、引き上げていきました。  
一助、カヨ、若い衆が円了のもとに駆け寄り、見事に急場をおさめた円  
了に礼を言います。

一助が、「住職に迷惑がかかるような普請は決してしません！」と力強  
く言うと、それまで態度を決めかねてきた村人たちも、口々に「おらも  
手伝わさせてくださいええ！」「おらも！」と言いながら寄ってきました。  
円了と一助の周りには、村じゅうの者が集まって大きな輪になりました。

N こうして、村人が一助とカヨ、そして円了を中心に一致団結し、谷に、  
土石流を食い止るための川普請をしようという気運が高まったそのこ  
ろ、庄屋の家では、源兵衛と組頭の新八らが集まっていました ・ ・ ・

※カゲマイクで

源兵衛 普請のことがお上に知れる前になんとか辞めさせねば ・

新八 庄屋様、この際、このままやらせておきましょう

N 新八は、「村普請で石堤をこさえては、お上の処罰はまぬがれないが、  
円了と一助が無断でやるのなら、罰せられるのは奴らだけですむ。

つまり、苦勞せずに堤はでき、自分たちに立てつく目の上のたんこぶは、  
一掃され、一石二鳥だ」と、にんまり笑いました。

〈暗転〉

## 7 藤代村・川浴いの一角(昼)

N それから、三年の月日が流れました。

春。池田山の中腹に、春霞のような満開の桜の列があります。  
手前に流れる川中には間隔を置いて石垣が階段状に作られ、静かな流れを保っています。  
一助とカヨ、そして村の衆が汗を流して、コツコツと積み上げた石垣は見事に完成したのです！

### 〈間奏曲〉

・女子衆の明るく弾む話し声が聞こえてきます。

タエ おみっちゃん、おめでどう！ 祝言あげるんだって？ 花まつりが終わったら。

おみつ おとつあんの七回忌まで待とうと思ったけど、ややこができて：  
タエ ややこ！ お釈迦様もおとつあんも、きつと喜んでくださるわ！

今日は、堤ができたお祝いだし、おめでたいことばかりねえ！

N 谷川の川原では、村人が集まり、完成を祝って宴を始めています。  
酒の肴をこしらえたカヨが、集まりへ向かうと、少し離れた川岸に、一助がぼつんと佇んでいるのを見つけました。  
カヨは、主役の一助がいないと、宴（うたげ）が盛り上がり上がらないと言い、一助を引っ張ろうとしますが、一助は、カヨに言っておきたいことがある、と真顔で言うのでした。

### 〈心の花 カヨへ〉

ひとは誰も一人だと 心閉ざした私  
ひとひらの花びらが 舞い降りて  
かぐわしき香りが 満ちていく  
虚空を彷徨い 果ててかまわぬと

世を捨てた私を　あなたが変えた

守りたい　命を

守りたい　未来を

もう一度　もう一度　この手で

ひとは誰も一人では　生きていけぬと知った

やわらかな光が射して　暗闇の先を照らしていく

優しい優しい瞳に秘めた　あなたの強さに出会ってから

守りたい　命を

守りたい　未来を

もう一度　もう一度　この手で

ありがとう　命を

ありがとう　希望を

もう一度　生かされた　あなたに

一助　世捨て人だった私は、あなたのおかげでこの三年間、生きる意味を持つことができた・・石を積むたびに、死んだヤエも手を添えてくれるように感じました・・

カヨ　お礼を言うのは私の方です・・この三年間、村のみんなはあなたのもので、助け合って、堤を作ってきました。堤だけではなく、互いに信じあう心を、絆を、築くことができました。あなたが村を生き返らせたのです。一助さん、これからも、ずっとここにいてくださいね・・

一助　カヨさん・・いや、私は・・・

〈暗転〉

〈P A〉馬のひづめの音

※暗転のまま、カゲマイクで

N 川原で村の衆が、宴を繰り広げているころ、早馬に乗った何人かの役人が、庄屋の源兵衛のもとにやってきました。組頭の新人が、無断で川中に石垣を作ったふとどき者がいると密告したため、調べに来たのです。

その様子を見ていた村の若者が、一助たちのもとに知らせに走ります。

カヨ 一助さん、ここは私たちで何とかしますから、お逃げください！

一助 いいえ、私はこの日のために村に留まっていたのです。この川普請の一切の責任を負うために。これが、私のけじめです。世を捨てた私に再び生き甲斐をくださった皆さんのためにお調べを受けます。だめです！ お咎めを受けるなら私も一緒に！ 私があなたに普請を助けてくれと頼んだのではないですか！

円了 「一助さんが、責任を負って、身投げしたと見せかけ、山から逃げてもらいましょう」

N 気乗りしない様子の一助を、円了が、ひとまず寺へ連れて行きました。

〈暗転〉

〈明転〉

N まもなく、源兵衛と新人に案内されて、役人たちが、川に築かれた石堤を見るために、谷にやってきました。

普請に詳しい役人の一人が、堤を見ると、感嘆の声をあげました。石垣が川の勢いをそぎ、大水の際、両岸への氾濫を防ぎ、対岸の山洞の村にもご利益をもたらす工法である、興奮したように言います。

上役の役人は、源兵衛に、川普請の首謀者である一助を連れてくるよう命じますが、組頭の新人が、一助の姿が見当たらないと報告します。

新人は、一助に調べが及ばぬよう逃がしたのだろうと、円了に詰め寄りますが、円了は、沈痛な面持ちでこう言いました・・・

円了 一助さんは、滝つぼに身投げなさいましたッ・・  
新八 何をたわけたことを！

円了 姿が見えんので、村の衆と手分けして探しましたら、滝壺の近くに揃えた草履と、妹さんの形見の観音菩薩さんに添えてこの書状が・・

N 書状にはこう書かれていました。

「此度の石垣づくりは、私の一存にて行ったものにございます。  
私は、藤代村の人たちを、対岸にも出水の被害が及ぶことがない工法で堤を作るので、お咎めを受けることはないと言いき伏せ、普請の手伝いをさせました・・何のお許しもなくこのような所為によって、お上を冒とくした罪を、私の命をもって、償いたいと存じます」

N 役人は、この書状を踏まえて、次のように沙汰を言い渡しました。

「石垣によって、尾張藩のご領地に障りがなくどうか、ご利益がありしかも首謀者が身投げをしてけじめをつけたとあっては、わざわざお上へ報告する必要がない。此度の申し立ては無かったこととする」  
新八はほっとした顔で、源兵衛は複雑な面持ちで、役人を見送りました。

円了 (震える声で) ほ、本当に、飛び込んでしもうた！ 私の、この目の前で！

カヨ ええッ？・・う、うそ！ そ、そんな！

新八 遺体は大雨で水かさが上がらん限り、引き上げられんな・・

タエ 一助さんが身投げした？ うそ！

村男A お上に黙って石垣をつくった罪を一人で背負いなさった！

村男B そんな！ 一助さんは、おれらの恩人じゃねえか・・

カヨ い、一助様・・！ (泣き崩れる)

〈カヨ、村人の悲しいすすり泣きで、暗転〉

## 8 藤代村 ラストシーン

N 一助が、谷川の石垣づくりの責を負って滝つぼへ消えてから、また三年の月日が流れました。

藤代村は、実りの秋。棚田いっばいに、黄金の稲穂が頭を垂れ、村人は収穫に勤しんでいます。緩やかな流れの川では、子どもたちが、銚や網を持ち、魚捕りをしています。

カヨがひとり、川に沿って、谷の方へ、歩いて登っていきます。息をきらしながら、「神明神社」と掲げられた鳥居をくぐります。

と、目の前に、じつと手をあわせる父源兵衛の後ろ姿がありました。

三年間、ろくに口を聞かなかった父と娘ですが、カヨが、「一助さんの月命日には、お父様が必ずお参りしていたのを知っております・・・」

と話しかけると、二人の心がようやく打ち解けました。

源兵衛は、初めて自分の心情を、娘に打ち明けます。

庄屋の立場でありながら、大水の度に田畑をのまれ家を壊され、村の衆が泣く姿をまのあたりにしながら、何もしなかった自分のふがいなさを、一助に思い知らされたこと。庄屋という立場ゆえ、自分に抗って命を落とした息子蔵之介の死を嘆くこともできなかった辛さ、自分の故郷でもないこの村を、命を懸けて守った一助に、一生頭があがらない思い・・・。

カヨ 一助さんを弔って、神明神社まで建ててくださったんだから、一

助さんもきつと浮かばれるわ・・・

源兵衛 蔵之介と一助さんの命を、ワシらは背負って生きねばならんな。

カヨ (涙声で) はい。そしてヤエさんの分も・・・

源兵衛 しかし、不思議よ、のう。一助さんの遺体はどうとうあがらなんだ。

カヨ ええ、まるで、天にでも昇ったみたい・・・

N 父と娘は、谷を見上げました。

里からは、棚田で収穫をする村の衆が、豊作の歓喜に包まれ、踊り、歌



う声が聞こえてきました。

〈かすみの溪音頭〉  
おんど

Tutti)

ハアー 春は霞よ 朧おぼろの月夜

霞間ヶ溪じや 桜が見ごろ

桜団子だんごを お召しなさいな

池田の娘の ほっぺのような

ア チヨイナ チヨイナ

ハアー 咲いた咲いたよ ナツツバキ

ア チヨイナ

池田の山の 沙羅双樹さらそうじゆ

ア チヨイナ

さらさら流るる 杭瀬川くいせがわ

ア チヨイナ

だんだん茶畑(チャバタ)に 陽ひが昇り

池田のお茶の かぐわしさ

ア チヨイナ チヨイナ

ハアー つるべ落としの 秋の陽に

映える紅葉もみじの 鮮あざやかさ

揺れるたわわな 稲穂の実り

一助宮みやに 供そなえましょう

豊年万作 ありがたや

ア チヨイナ チヨイナ

カヨ)

ハアー しんしん降るよ 銀ぎんの雪

タエ)

池田の御山おやまも 雪化粧げしよう

春には大地に 染しみ入りて

一助) 命の水と なりましょう

Tutti) 恵みの里の ありがとう

一助宮を 詣でましょう

ハアー ア チヨイナ チヨイナ

〈暗転〉

※そのままファイナル曲へ突入

〈終曲〉

N 藤代の村の衆が、豊かな実りを、天に、山に、川に、大地に感謝して、  
歌い踊る様子を、少し離れた川辺から、編み笠越しに見つめる一人の  
托鉢たくはつがおりました。

カヨがふと、托鉢の視線しせんを感じ、振り向きます。

托鉢は、もう、後ろ姿を見せ、チリン、チリンと鈴すずの音ねを残し、通り過ぎて行きました。

(完)

あとがき

ちよつと贅沢なオペラ絵本「かすみの溪の一助」はお楽しみいただけただでしょうか。題材となった民話「小僧が滝」は、池田町で古くから語り継がれており、ふるさと池田文庫「池田よもやま話」や、町内小学校の社会科副「池田のむかし話」にも収められています。

でも、この民話をご存じでない町民の方も多いのではないのでしょうか。民話は「民衆によつて口承されてきた説話」ですが、この民話に登場する一助が堤を造ったことを証明する痕跡は確認できません。しかしながら、今から三六〇年以上前の慶安三年（一六五〇年）の八月下旬、この地方に長雨が降り注ぎ、木曾・長良・揖斐の三川や支流で大出水となり、丙寅に当たる年であつたことからのちに「寅の洪水」と呼ばれた大洪水が、大垣藩領地や安八郡大島村、開発村を呑み込み、ここ池田山麓の藤代村も谷川から溢れた土石流による大災害に遭つたことは、史実として残っています。

そして、霞間ヶ溪（かまがたに）藤代地区には市助宮と呼ばれる神明神社があり、その由来之碑には「・・市助氏が御加護を祈念するため神明神社を当地に祭祀されたので以来幾度かの災害も免れている・・」と刻まれています。谷川上流にある「小僧ヶ滝」を訪れると、水をたたえる滝つぼからの涼風とともに、私たちの思いは、しばし、一助という人が実在したかもしれない時の彼方へ飛んでいきます。

霞間ヶ溪は昭和三年、山桜や彼岸桜など多くの天然変種を含む桜の群生地として、また桜の織り成す景觀のすばらしさから、国の「名勝特別天然記念物」に指定され、日本桜の名所百選にも選ばれています。花見橋を南に渡ると、西側に滝へ続く道があり、さらに南側へ進むと「市助宮」があります。現在は、土石流の災害から地域を守る為に造られた堰を谷川に見ることができません。

今回、この民話を、池田町の未来を担う子どもたちに伝え、先人たちが私たちの故郷を守ろうとしてきた思いを知ってもらい、豊かな心を育むことを目的とし、この音楽劇を制作することになりました。池田町在住の岐阜女子大学教授地域文化研究所長丸山幸太郎先生が、以前に池田中学校の先生方の

演劇用に執筆された台本をもとにして、大垣市在住のボランテニアライターの丸山稔子さんに脚本をお願いしました。誰もが親しみやすい オペラ絵本として、押山晶子さんに作曲を依頼、絵本のイラストは揖斐川町出身のイラストレーター 坪井繁和さんに描いていただくなど、地元の方を中心に協力いただきました。この台本を地域学習にも役立てていただければ、お願い、小中学生の皆さんが登場人物を想像できるように、人物の年齢設定をしました。演奏が難しい時は詩を朗読していただければと存じます。

近年、地球温暖化による気候変動に起因するといわれる、ゲリラ豪雨や極端な降水現象による洪水被害、また、地震や津波災害が日本各地で頻発しています。防災への備えや意識、地域住民の繋がりの大切さが、見直されています。よそ者の一助が、お上からのお咎めも構わず、一切の責任を背負って堤普請に着手し、その姿に心を打たれた村人たちが、やがて結束し、一助を手伝って川普請を成し遂げる様は、現代、災害対策が喫緊の課題となっている現在の私たちも共感でき、自分たちならどう行動するだろうかと考えさせられる物語ではないかと思えます。再演性の高い「オペラ絵本」という形の舞台芸術を通して、池田町の歴史と民衆の心を伝えるこの民話が、より多くの方に親しまれ、末永く伝承され、後世への郷土遺産となればと願うものです。

監 修 .. 丸山幸太郎  
構 成 .. 西田充晴  
脚 本 .. 丸山稔子  
作 曲 .. 押山晶子  
イラスト .. 坪井繁和  
制 作 .. 特定非営利活動法人ぶんかのタネ